

差別する

陽羅 義光

差別がいけないことだとは、「いまなら」「まともなら」誰でも知っている。

だが「いまじゃない」時代には知らなかった。

「まともじゃない」者がわんさかいたせいではない。

差別がその時代の社会秩序を（必要悪として）保っていたのだし、差別があつてこそ争いも無かつた。

現代にもそんな国がまだあるが、傍から見るとずいぶん野蛮だと思われるものの、あんまり突つくと秩序も平和も崩壊する。

差別が生んだ秩序と平和なんて紛い物だし、そんな間違つた伝統と風習の国は崩壊してもいいから、差別を無くすべきだとの意見もあるし、その意見は世界的視野で見ればおそらく正解なのだが、なにせ差別の歴史が長すぎるからそう短絡的にはいかない。

それよりも自分たちの足元を見つめる方が先決ではなからうか。

日本だってまだまだ差別が残っている。

部落民差別、朝鮮人差別、不治の病人差別（ライ病患者など）、貧乏人差別はずいぶんと消えたけれども、案外表面的なことなのかもしれない。

いや貧乏人差別はちつとも変わっていないか。

〈トリクルダウン理論〉を相変わらず現代の政治家は活用している。

つまり金持ちが豊かになれば貧乏人にも波及すると云う理論。

つまり豊かな馬にたっぷり麦を食わせれば、道に落ちる馬糞のなかに麦粒がいくらか混じつて、それを啄む貧しい雀もおこぼれに預かる、つてことだ。

学校や会社での「イジメ」も、醜い差別根性が根底にあつてのものだと思われる。

女性差別（もしくは男性差別、あるいはオカマ差別）なんかはもう無いと思われていたが、都議会の野次事件で、まだまだ根深いことが露頭した。

それらは良識ある文化人が取り上げて、いろいろ云ってくれるので、まだ救いがあるから、あえてここでは取り上げない。

ここでは、いわば「年齢差別」を取り上げる。

年齢差別なんて聞いたこともないだろうし、そんな言葉も辞典にはまだ無いだろうが、百歳を越えてなお現役医師の日野原重明が言い始めているし、いずれ遠からず定着される言葉だから、覚えておくといい。

これは簡単に云えば「若造のくせに」「年寄りのくせに」という、あれである。

これは性差別はもちろんのこと、「部落民のくせに」とか「朝鮮人のくせに」とか云っていた発想と変わらない。

昔は「若造のくせに」と若者が結構差別されていたが、今は「年寄りのくせに」と老人が結構差別されている。

どういうときに差別されるかと云うと、おせっかいとかお呼びでないとか場違いとか、そんなときだ。

考えてみれば大昔から「年甲斐もなく」とか「年寄りの冷や水」とか「老婆心」なんて言葉があった。

昔は老人自身が差別を忌避するために己を揶揄し、なるべくでしゃばらなかつたのだが、今は老人自身のライフスタイルが変わってきたのかもしれない。